

## 30年孤島で生き続けた偉大なる先人 中村輝夫さん

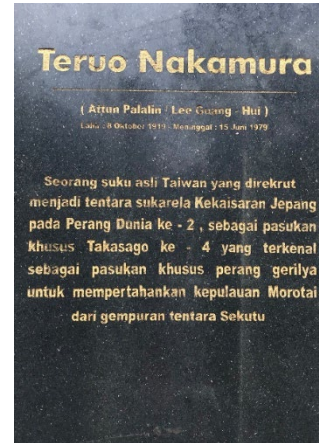
モロタイ島に2年半ぶりに訪問して、初めに訪れた場所は、中村輝夫さんの銅像でした。自分がモロタイ島を知ることになった、先人として敬意と感謝の念で訪問をさせて頂きました。

初めて訪問した時は、その銅像に書かれている内容も理解していなかったが、今回、以下の内容であることがわかりました。

「第二次世界大戦中連合軍の猛攻撃から  
モロタイ諸島を守る特別ゲリラ戦部隊として  
有名な高砂第4特殊部隊として  
大日本帝国の義勇軍に徴兵された台湾人  
1919年10月8日生まれ  
1979年6月15日死亡」

現地の人々から尊敬されていて、現在モロタイの人たちが日本人に親しく接して下さることに感謝です。

2023年9月20日訪問



30

30年<sup>ひと</sup>独り孤島で戦った日本兵、高砂義勇隊<sup>たかさご</sup>勇士

Teruo Nakamura

中村 輝夫 (李光輝) (台湾・台東県出身) 1919 ~ 1979



参考：『選ってきた台湾人日本兵』（河崎眞澄著、文春新書）、『スニヨンの一生』佐藤愛子著、文春文庫、『日本人の足跡3』（産経新聞取材班著、産経新聞社）ほか

1945(昭和20)年の終戦から27年を経た72(昭和47)年、戦死扱いされていた横井庄一軍曹がグアム島で発見され、2年後の74(昭和49)年3月には、フィリピン・ルパング島で小野田寛郎少尉も見つかり、大ニュースとなった。30年近く独りで戦闘継続していた事実、世界は驚いた。その8カ月後、インドネシアのモロタイ島で1人の日本兵が発見されたが、前述の2人以上には騒がれなかった。大日本帝国陸軍一等兵・中村輝夫55歳である。彼の存在が程なく人々から忘れ去られた背後に、無慈悲な国際情勢と、30年間に亘った孤独な闘いにも勝る悲劇があった…。

74(昭和49)年12月、モロタイ島で戦った元輝第2遊撃隊長の川島威伸は、戦友代表として遺骨収集に行った際、「元日本兵らしき人物出現」の噂を聞き、現地のスパルディ中尉に捜索依頼し、後ろ髪を引かれる思いで帰国した。その2週間後、密林で旧日本兵が発見され、2600km離れたジャカルタの日本大使館員が飛んで面接。

標準日本語で所属部隊名、階級などを答え、中村輝夫という名や本籍地を漢字ではっきり書いた。彼の毎日は起床後の洗面、皇居遙拝、体操から始まり、三八式銃は整備されていて武器尊重の精神が伺えた。現地のサレバサラ大將が、大使館員に語った。「中村を規律厳正で忠勇な日本軍人の生きた鑑として賞賛すると共に、インドネシア軍の精神教育のテーマとすることを決めた」と。

19(大正8)年、台湾台東県で原住民・アミ族の農家の6人兄弟の末っ子に生まれ、民族名史尼育唔、日本名は輝夫。台湾は日清戦争の結果、1895(明治28)年の講和条約で日本に永久割譲された24年後のこと。小学校では野球や相撲好きで成績は全5。42(昭和17)年、



モロタイ島に建つ中村輝夫(李光輝・スニヨン)記念碑

台湾で陸軍特別志願制度が開始されるや即、新婚直後の23歳の中村は血書<sup>したた</sup>を認め志願。翌年、妻と生まれたばかりの長男を残し、出征した。

彼と同じく特別志願した、「首狩り族」との異名を持つ勇猛果敢な原住民部隊は、「高砂義勇隊」と呼ばれ、兵站などで奮闘した軍属を含め約8千人が従軍。南方の密林に慣れない日本兵に代わり大活躍した。台湾全体では軍人・軍属合わせて約20万人が従軍、3万306人が戦没している。

44(昭和19)年7月、所属した輝第2遊撃隊は、モロタイ島に布陣。2カ月後、米軍はモロタイ島に上陸。密林に逃げた部隊から、偵察を命じられた中村ら3人は、米兵と遭遇。左右の戦友が撃たれ彼は、米兵を斃し逃亡するも部隊と離ればなれとなり、終戦を知らず潜伏生活が続く。

その間、現地人と知り合い「絶対秘密」との約束で、月1回程「補給」を受けた。その男が死に際に、絶対漏らすなと息子に秘密を打ち明けたことが、旧日本兵発見の発端となる。

中村発見に日本政府は困惑。2年前の72(昭和47)年に、中国と国交回復、台湾と国交断絶していたからだ。大陸への村度で冷遇された中村は、台湾へ帰国。「戦死者」生還に歓迎されたのも束の間、妻から再婚していたと告げられ、衝撃の余り歓迎会場から脱走。その後、「夫」が身を引く妻と「再婚」。日本語が禁じられた国民党支配下で名を「李光輝」と変えられ、日本語が使えず苦しみ。密林で30年間無病だった中村は、文明生活4年

で肺癌に倒れ「日本に帰りたい」の言葉を最後に59歳で死去した。

モロタイ島では、中村は英雄のまま。 「ナカムラ通り」「ナカムラ小学校」が造られ、彼が発見された場所には、銅像が建てられている。(文/小野敬)